

「宋明思想」研究の現状と課題

早坂俊廣

一 はじめに

結論を最初に述べるならば、現代の日本において、宋明思想研究は壊滅的な状況にある。と言っても、例えばそれは、知と教養の世界において宋明思想およびそれに関する研究が何ら有効なメッセーヂを発し得なくなっている、などという類の話ではない。そんなことはここで改めて言うまでもないことであるし、そもそも現代の日本では、知と教養の世界そのものが崩壊しつつあるからだ。あるいは、人材や業績が枯渇し……といった、巷間よく耳にする話でもない。この点で言えば、本稿が紹介するように、宋明思想研究においては、今後何十年と語り継がれるはずの力作が、ここ五年間だけでも陸続と提出され続けてきた。この分野の活況ぶりは、日本の中国学全体から見ても特筆に値するのではなからうか。

だから、私がここで言いたいのは、もう少し限定された話、つまり、日本の中国哲学研究の世界において、「宋明思想」という枠組みが成り立たなくなりつつあるということ、である。言い換えれば、「宋明思想」という問題の括り方自体が問い直されつつある、そういう意味での壊滅状況、ということである。本稿では、すでに触れ

たように、最近五年間（一九九九年から二〇〇三年）に出版された宋明思想関連の研究書のいくつかを紹介しつつ、このような状況について論及したい。紹介する作品名を具体的に記すならば、市来津由彦『朱熹門人集団形成の研究』、木下鉄矢『朱熹再読 朱子学理解への一序説』、小島毅『宋学の形成と展開』、土田健次郎『道学の形成』、三浦秀一『中国心学の稜線 元朝の知識人と儒道仏三教』である。これら五つの書物を取り上げるのは、もちろんそれらを取り上げるのに値する意義深い作品であるからに他ならないが、それ以上に、研究史上における上述の状況変化を、そのどれもが体現しているように私には思われるからである（一）。このような問題関心による整理のため、多分に我田引水の的な整理となつてゐること、具体的な内容についての紹介ではなく作者の視点・構えに焦点を当てた紹介となつてゐること、なおかつ、あくまでも紹介であつて論評にはなつてゐないことを、最初にお断りしておきたい。批判や疑念も記してあるが、叙述の流れを優先させた結果として、それらをすべて注で記すことになつてしまつた。だから、注も忘れず読んでいただきたいのだが、多くは印象批評にとどまつてゐる。本格的な論評は、別の方々に期待したい（二）。

二 紹介

以下、小島、土田、市来、三浦、木下各氏の作品を、この順序で紹介していく。啓蒙書的作品から話を始め、北宋・南宋・元と時代順に思想史研究を追って行き、最後に、少し肌合いの異なる哲学書で話を締めようという算段である。

1 小島毅『宋学の形成と展開』（創文社、一九九九年）

該書は、『創文社中国学叢書』の中の一冊として刊行された。この叢書のラインナップを見ると、恐らく啓蒙書・入門書としての役割が強く意識された企画であるように思われる。該書の叙述も、平易でなじみやすいものである。にもかかわらず、該書は、啓蒙書・入門書として見るならば、実に奇抜で破格な書物である。作者自らの点を意識していたのであろうか、該書は「本書を読んでいただく前に、著者と読者との間で音合わせをしておきたい。と言うのは、両者の音程がずれていては、本書の意図するところを理解してはいただけないと思うからである」（「v頁」という断り書きで始まっている。小島氏は、自己の書物を「偏癖の書である」（「vi頁」とも称している。以下が、その「偏癖の書」の構成である。

- I 天：一、天譴論 二、郊祀論 三、天理による統合 四、朱熹による展開 五、天譴論の再現 六、郊祀論の再現

- II 性：一、北宋の性説 二、朱熹の定論 三、心身情性 四、無善無惡 五、朱陸の異同 六、非難と調停

- III 道：一、主題の構成 二、理学の開山 三、虚像の成立

四 從祀の昇降 五、唐宋の変革 六、道統の後継

- IV 教：一、聖人の教え 二、礼学の意義 三、冬官の補亡

四、教化の職官 五、家礼と郷礼 六、漢学と宋学

『中庸』の「天命するをこれ性と謂ひ、性に率ふをこれ道と謂ひ、道を修むるをこれ教と謂ふ」という文言から採った正統的で典雅な章立てであるが、このような書物がなぜ「偏癖の書」であり、「著者と読者との間で音合わせ」が必要なのであろうか。

その理由はこうである。例えば、該書のIは「天理」というきわめて朱子学的なテーマを扱いつつも、分析の機軸は「天譴論」「郊祀論」であり、これらは、哲学研究にはなじみにくく、歴史研究の領域に属する議論である。IVは、礼学という、それ自体はきわめて重要な研究領域であることが一応は認知されながらも、朱子学や陽明学を正面から扱う際には傍系扱いされざるを得ない領域に取り組んでいる。IIの性に関する議論については、作者自らが漏らしている。「本書でも、心性論の中身に立ち入ることを避けながら、心性論をめぐる今日の言説に潜む問題点の方にテーマをずらして叙述を進めた。宋から明にかけての心性論の内容を知りたいという読者には、肩すかしを食らった感をいだかれたことであろう」（「二五六頁」。このように、従来の研究史において王道といえる領域からはずれたところで議論を組み立てているからこそ、該書は、音合わせが必要な偏癖の書なのである。

さて、私は直前の段落で、「哲学研究にはなじみにくい」、「正面から扱う際には傍系扱いされざるを得ない」、「王道といえる領域からはずれた」といった表現を、あえて採ってみた。これらの表現に違和感を覚えた向きは、恐らくすでに小島氏の論著に触れ親しんで

きた方であるに違いない。

そもそも、私があえて採った表現を支えている認識・判断は、一体どのような権利においてその正当性を主張しているものであろうか。実は、このような認識・判断は、ある種の物語の内部にいてそれに気づいていないからこそ、為したり下したりし得るものではないのだらうか。自著を「偏僻の書」と言つて謙遜する小島氏の温和な物言いにだまされてはいけない。実は、小島氏は、従来の研究史に対して、そのような問いかけを極めてラディカルな形で投げかけているのである。例えば小島氏は、朱熹と陸九淵の対立点を「道問学」と「尊徳性」の相違とする二項対立図式について、「性理学と心学の二項対立の構図によって儒教史が展開したという理論は、まさにそうした「全体から見て無視してかまわないような事象を除けた形で全体なるものを構成する——早坂」排除の論理によって成立している。したがって、その論理にのつとつて研究しているかぎり、理論自体が問題視されることはありえない」（二二〇頁）、「いかにして陽明学が誕生し普及したかをテーマとするこのテキスト『明儒学案』——早坂」の枠の内側で作業するかぎり、上述の二項対立からは自由になれない」（二二二頁）と語り、『太極図説』をめぐる従来の理解をめぐつては、「それは一つの美しい物語ではある。だが、わたしたちはいつまでも朱熹が作り上げた語りⅡ編りの世界に安住しているわけにはいかない。北宋の思潮が実のところどのようなものであったのかは、『周敦頤神話』から自由にならないかぎり見えて来ないであらう」（二五九頁）と述べている。「偏僻の書」という小島氏の自称は、実は、氏の取り組みを「偏」と見なさざるを得ない研究史、まさしく「宋明思想」研究に対する異議申し立てであつた。

この意味で、小島氏こそは、現代における「正道を歩む異端」（3）なのである（4）。

2 土田健次郎『道学の形成』（創文社、二〇〇二年）

該書は、「道学の形成過程を叙述した一個の思想史」（五三七頁）である。しかも、作者の自負する如く「ジグソーパズルのピースを一つずつ埋めていくような」（同上）作業の果てに完成された、整然として緊密な統一性を有する作品である。読者は該書を通読することによって、北宋思想史に関する豊富で体系的な知見を多く得ることとなるであらう。

該書の構成を示すと、

序章：一、宋代思想史研究の根本問題 二、道学研究の根本問題

題

第一章 北宋の思想運動：一、慶曆前後に至る思想動向

二、歐陽脩—中央の動向 三、陳襄—地方の状況

第二章 二程の先行者：一、胡瑗—程頤の師 二、周程授受再

考

三、宋代思想史に於ける周敦頤の位置 四、二つの太極図

第三章 程頤の思想の基本構造

第四章 程頤の思想と道学の登場：一、程頤の思想に於ける

「理」の性格 二、「理氣二元論」観の検証 三、程頤「易伝」の思想

第五章 道学と仏教・道教：一、道学と仏教に於ける議論の場

と範疇 二、道学と華嚴教学 三、死の問題から見た道学の

仏教批判 四、二程の氣論と道教

第六章 対立者の思想：一、王安石に於ける学の構造 二、蘇軾の思想的輪郭

第七章 道学の形成と展開：一、晩年の程頤 二、楊時の立場
終章：一、道学史上に於ける朱熹の位置 二、朱熹道統論の性格

となる。「序章」において土田氏は、「従来の中国思想史がそれぞれの枠で整然と叙述できたのは、思想そのものをその発生地점에たちかえって把握するよりも、思想史として記憶されたものを連結していったからである」「(四頁)」と指摘している。ここで言われている「発生地点にたちかえって把握する」姿勢こそ、該書の(そして本稿が取り上げる全作品に共通の)基本的な構えに他ならない。「そこで現在必要なのは、まず個々の思想が出現する状況の具体的把握を通してその実態を検証すること、次にそれらの思想が思想史として記憶されていく過程を追跡し、この両者を混同しないことである」「(五―六頁)」。このように土田氏が釘を刺すのも、「従来の道学史は、道学の学説展開を朱熹を軸にして語るのが主流であった。また明代思想を出発点にしてそのイメージをそのまま宋代に遡源させる議論も往々にしてなされてきた」からである。「それに対し本書では、道学内部の思想的自己展開のみならず、道学がいかに外部を意識して思想的言説を展開していったかにも大きな比重を置き、あくまでも北宋初から南宋にかけての思想動向の中での道学の形成と展開を浮き上がらせようと試みた」「(五三九―四〇頁)」。

このように土田氏は、特定の思想家を後世の記憶をもとに安易に特権化・中心化することなく(5)、丁寧に時代思潮を解析していく。章立てからも分かるように、歐陽脩・陳襄・胡瑗・王安石・蘇

軾といった、重要ではあるもののその思想史的位置づけとなるとなかなか見通しの立てづらかった思想家達を詳細に分析し、その道学との共通項と差異性とを明快に検証している。また、周敦頤という、従来は「道学の祖」として祀られてきた思想家を(脱神話化)したり、楊時という、朱熹へと至る道筋の中でばかり扱われがちであった思想家を、当時の時代思潮の中に還して検討したりしている。それのみならず、仏教・道教と道学の差異についても明確化したり、道学登場の政治的な意味合いについても言及したりと、北宋から南宋にかけての思想動向を網羅的に対象としている。この点こそ、該書の第一の功績であろう。

しかし、単に網羅的であるのみならば、「二個の思想史」たり得ないであろう。該書が作者の自負する如く「二個の思想史」たり得ているのは、そこに一貫する視点が存在するからである。その視点とは、程頤の「理一」説を指標とするものである。例えば、「理一」説の政治的機能について「そもそも道学の創始に関わった者たちが共有していたのは「一」の思想であって、程頤はそれを「理一」の「一」として捉え、そこに道学草創期における程頤の個性があるが、この「理一」は道学と中央を結ぶ作用を果たしたのではなかったかという大胆な推測も可能なように思われる。「一」の思想は、外界に対する内心の心の安定への欲求から出てくるものであるが、このような多く在野ではぐくまれてきた境地を問題にする思想と、中央で模索されている新たな士大夫の秩序理念とを橋渡しできるのが「理一」ではなかったかと考えたいのである」「(四八頁)」とする。あるいは、「程頤は理一の境地への到達可能性を万人に認め、それを最初から前提に窮理を要求するが、王安石にはそのような議論は無い。確か

に至高の境地は「一」であつても、そこへの到達の可能性を容易に普遍化できぬものに共通認識の根拠を求めることに禁欲的なのである。「三三二頁」というのは、「理一」による思想弁別の例である。

もちろん、程頤自身の思想分析にも、「程頤が「理一」をいうとき、その関心は自然界の法則の分析追求にはなく、人間内の理に強く向けられていたことに注意せねばならない。『易伝』に象数に対する関心が薄いのもそのためである」「二六二頁」という形で言及がある。私が「整然として緊密な統一性を有する」と該書を評したのも、このような統一的な思想史理解を意識してのものであつた(6)。

思想史理解の指標という点で、該書の特徴をもう少し挙げておくならば、〈中央—地方〉という分析軸の提示や、〈共有された議論の広がり〉とでも言うべき事象に対する着目がある。従来の研究では、周敦頤から二程、そして朱熹へと、授受されるべくして授受された「真理」を自己において体現せんとする姿勢、あるいはそういった学問の血脈を共感的に究明しようとする姿勢が、ともすれば多く見受けられたわけであるが、土田氏はそのような姿勢には批判的である。自らを朱熹の「道統」の最後に置かんとする姿勢、道統論的な「羈絆」に囚われた態度、そういったものを超克する意図でもつて土田氏は該書を著しており、このような志向が氏を社会的な視点へと誘つていくように思われる。ここにもまた「宋明思想」研究に対する異議申し立ての姿勢を看取することができよう。

3 市来津由彦「朱熹門人集団形成の研究」(創文社、二〇〇二年)

該書は、上述両氏の論考と問題意識をかなりの程度において共有している。市来氏は、「宋明」学像形成の成り立ちに配慮しないま

まの研究に対し「その対象の儒教、儒学の主観の内部に埋没したままの理解にとどまつてしまいかねない」と危惧の念を表明し、「『宋明』思想とひとくくりにする像のみならず、そもそもその像の出発であり前提となる中国「朱子学」も、歴史的認識という視点でいえば、もとは「ない」状態から「ある」状態になったものである。そのことを思うと、その「ある」ものはなぜあるのか、どのようにしてあるようになったのかということが、初発の素朴な疑問となろう。本書の研究が向かう方向は、まさしくこのことの検討にある」(四頁)と自らの意図を語っている。本稿の表題も、この市来氏の指摘に負う所が大きい。

さて、市来氏と上述両氏との大きな違いは、その研究手法にある。まずは、該書の項目立てを確認しておこう。

序説：一、本書の課題 二、主要資料の特質と資料処理の視点

三、質疑応答型資料における朱熹言説の特質 四、本書の構成

第一篇 朱熹思想形成の場—北宋末南宋初の閩北程学—

第一章 北宋末における程学の展開：一、程門初伝と二程語録

資料 二、陳淵の思想 北宋末南宋初における道学継承の様態—

第二章 南宋初の程学と閩北における朱熹：一、閩北における

朱松と朱熹—程氏語録資料の収集をめぐる— 二、朱熹の

「雑学升」とその周辺

第二篇 朱熹門人・交遊者の朱熹思想理解

第一章 四十代までの朱熹とその交遊者達：一、福建における

朱熹の初期交遊者達 二、何錡と朱熹—福建初期交遊者の朱

熹說理解——三、廖德明・福建朱熹門人從學の一樣態——

第二章 乾道・淳熙の學——地域講學と広域講學——一、乾道・

淳熙における士大夫思想交流 二、朱熹 呂祖謙講學論 三、

浙東陸門袁燮と朱熹

第三章 五、六十代の朱熹とその門人、交遊者達——一、朱熹五、

六十代の門人、交遊者達 二、呂祖俊と朱熹 朱熹広域講學

の展開——三、陳文蔚における朱熹學說の受容 四、朱熹祭

祀感格說における「理」——朱門における朱熹思想理解の一樣

態——五、朱熹晩年の朱門における正統意識の萌芽——呂祖俊

と朱熹・朱門の講學を事例として——

「序説」に見えらる如く「質疑応答型資料」に着目し（と言うよりも、思想資料の質疑応答的な性格に着目し）、それが、いかなる状況における、いかなる性質の質疑応答であったのかを徹底的に分析するのが、市来氏の研究方法である。勢い考察のアクセントは、質疑応答をしている「師弟の關係」や、彼らのよって立つ基盤である「地域」に置かれることになる。

このようなことから、市来氏の研究は、「大思想家を正面から扱うことなく、その弟子たちをこまごまと取り上げている」とか「特定の地域に関する個別研究をしている」とかいう印象を、少なからぬ人々に与えているように（私には）思われる。しかし、それは大きな誤解である。市来氏は、「朱子學」が「ある」ようになりつつある現場、まさに「朱子學」が立ち起こりつつある發生地点を見極め、それを緻密に記述しようとしているのである。「ある」ことの根源を問ひ質すという意味で、これもまた極めてラディカルな研究姿勢と言えるであろう。市来氏は言う、思想資料の質疑応答的な側

面に着目することによって、「朱熹の言葉の前提にある質問者の思考を透視でき、朱熹の言説が何に向かつて表出されているのかが明らかとなる。朱熹の言葉を、その交遊者、門人の違和感、共感、質問等との共同作業によってつむぎだされた言葉とみることににより、「朱子學」を形成していく朱熹思想受容者の心性を明らかにし、朱熹の社会的機能をきちんとはかることができるようになる」と考えられるのである（一七頁）と。

もちろん、このような質疑応答も、個別の場面における個別の質疑応答としてしか扱われないのであれば、朱子學形成への理路など見えてはこないであろう。しかし、市来氏は周到に、それらを時代状況や人脈といった流れと広がりの中で捉えていく。この辺りの手順の精密さには、驚嘆するしかない。何気なく挿入されている表や図（どこでも構わないのだが、例えば一八〇—一頁）を作成するのに、一体どれだけの労力が費やされたことだろうか。そして、繰り返しになるが、それらの精密な考証が、朱熹學說を「朱熹の主観側からだけではなく、その社会的機能面から客観的に捉える」意図、「地域」思想、及び思想と科擧システムの関わりといった問題（「五一—一七頁」）への志向に支えられている。語り合いの場というミクロの次元が、これら知の社会環境というマクロの次元と相關的に把握されることで、なかつた「朱子學」があるようになっていく回路が明確化されていく。我々は、市来氏の書を読むことで、実は、「朱子學の誕生」という世界的な事件の現場に立ち会うことになるのである（七）。

4 三浦秀一『中国心学の稜線—元朝の知識人と儒道仏三教』（研文出版、二〇〇三年）

該書については、まずは副題を見れば、その梗概はつかみ得るであろう。文字通り、元朝知識人の思想世界について、儒道仏三教の枠に囚われずに縦横無尽に検討した意欲作である。以下に掲げる章立てを見るだけでも、その充実ぶりはうかがい知れよう。

序章 十三、四世紀中国の心学に関する覚書：はじめに

十三世紀中国の心学 二、十四世紀中国の心学 結語にかえて—本書の検討課題

上篇 金末元初の道学と許衡

第一章 金末の道学：一、道学移入の背景 二、ふたつの道学

三、趙秉文の道学 四、李純甫の三教合一思想 五、王若虚

の道学批判

第二章 金末の際の全真教：一、金朝南遷後の全真教 二、范

円礪と金滅後の知識人 三、新時代の教団像 四、王志謹の

説法 五、姪志真的教説

第三章 許衡の思想について：一、程朱学の再移入 二、許衡

の思想遍歴 三、許衡思想の構造 四、程朱学受容の時代性

五、胡適の「伊洛の学」 六、許衡思想のゆくえ

中篇 宋末元初の老子注と吳澄

第一章 元初の道仏対立と老子注：一、対立の渦中における全

真教団 二、北中国に対する影響 三、南中国に対する影響

第二章 老子注と朱熹の思想および内丹説：一、首章をめぐる

諸説 二、谷神不死章をめぐる諸説 三、吳澄による諸注へ

の反指定

第三章 吳澄の『道德真經註』について：一、『道德真經註』の

思想 二、吳澄思想における老子注の位置

附論 元朝南人における科挙と朱子学：一、科挙再開以前の士

風 二、元朝の意図する科挙 三、科挙再開に伴う混乱 四、

知識人による諸対応

下篇 宋濂と元末明初の時代思潮

第一章 宋濂の思想と行動 出仕以前：一、宋濂の自画像 二、

思想形成期における仏教と「文」 三、六經心学論とその波

紋 四、内丹説の批判的摂取 五、『龍門子凝道記』 六、『子』

を造形する思潮

第二章 宋濂の思想と行動 出仕以後：一、憂慮のなかの仕官

二、宋濂と朱元璋 三、「文」の思想の展開 四、方孝孺と

「文」の思想 五、宋濂像の造形 六、明代中期の心学へ

簡潔にまとめてしまうと、金末元初、宋末元初、元末明初の時代思潮について、それぞれ許衡、吳澄、宋濂を中心に分析したもの、ということになってしまふのだが、そのような安易な簡略化を拒否するかのような濃厚で濃密な検証が、該書ではなされている。該書の特徴は、まずはこの濃厚さに求めよう。なかでも圧巻なのは、『老子道德経』やそれに対する注釈の検討を通して時代の思潮を詳細に読み解いた中篇である。『老子道德経』そのものの処遇や、その首章の「無名天地之始、有名万物之母」「常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼」といった語句に対する注釈を詳細に分析し、そこから、諸宗教間の対立、あるいは時代における内丹説や朱熹思想の役割・意義などを検証していくその手法は、思想史研究のあるべき道筋の一つを示しているように私には思われた。また、思想的に極めて重

要な存在でありながら、研究史において本格的に取り組まれることの少なかった宋濂を正面から扱い、着実な考証でその実像を明らかにしていった下篇なども、今後の研究に資すること大である。「宋明思想」という問題構成が採られると、どうしても「元」の存在は無視されがちになる。また、「思想」と称しつつも、実はそこに「儒学」しか想定されていないことも多かった。三教それぞれの存在意義や三教間の相克・融合がもたらす思想世界の豊饒性を予想することはできて、そこに実際に分け入っていくことは至難の業である。それを三浦氏は、本当に成し遂げたのである。

ところで、そもそも「中国心学の稜線」という題名には、作者のいかなる意図がこめられているのであろうか。三浦氏は自らの研究について、「その考察は、たとえて言えば中国十三、四世紀思想山脈の案内図。右の三者〔許衡、呉澄、宋濂のこと―早坂〕が、この時期の思想世界にそびえる三座の高峰であることは、疑いない。しかし本論は、その山嶺にいたる道筋を強調して描いたものにすぎない。かれらの前後左右に打ち連なる、緑豊かな思索のやまなみに対しては、ただその輪郭を写し取るばかりである。さらに本章の論述は、この大雑把な見取り図に浮かび出た「心学」の痕跡をたどり、それらを一本の稜線として繋ぐ作業でしかない。加えてその筆先もまた心許ないものの、数千年を超えて脈々たる中国知識人の思想的営為において、この二百年あまりの時期の思索が一個のまとまりを持った描出の対象となりうることは、以下の文章からでも了解されるはずである」(九頁)と言う。一般に「心学」と言えば、陽明学の代名詞(特に、朱子学とそれを区別する際の一番の指標)の如く語られることが多いが、三浦氏はそのような「心学」理解に疑義

を呈する(8)。「当該時期の知識人による心学運動が、全体としては、程朱学対陸学という構図を一要素としつつも、しかしそれに局限されない幅広さを有することを明らかにする。また、呉澄や宋濂などの心学を個別に取り上げた場合、思想的課題を絞り込みその解決を目指してゆくその思索の質が、朱熹や王守仁のそれと較べて遜色のないことも察知されるであろう」(八頁)という言葉の中に、三浦氏の狙いが端的に表されている。その狙いが確かな成果として結実していることは、言うまでもないだろう(9)。

5 木下鉄矢著『朱熹再読 朱子学理解への一序説』(研文出版、一九九九年)

冒頭、木下氏は「本書に編んだ各論稿は朱熹の具体的なテキストの言々句々を読み解く作業の記録である」(七頁)と述べる。「そんなことは当たり前じやないか」と思われる向きは、今すぐ各章を読み進めてほしい。この「具体的なテキストの言々句々を読み解く」という何気ない表現の持つ恐ろしさに気づくことだろう。該書は、まさに「具体的なテキストの言々句々を読み解く」という作業を、不敵なまでに強靱な思索と緻密で粘り強い考証でもって徹底的に実践した哲学書である。この点では、上述四氏の視点とは大きく異なっている。

該書の構成は以下の通りである。

- 第一章 鏡・光・魂魄：一、「明」と「照」二、「心」をモデルとして 三、月を鏡とすること 四、魂魄 五、眼球と視能力 六、月の光 七、「火日」は外影、金水は内影 八、鏡 九、疑問

第二章 様々な時間：一、一昼一夜 二、天氣流行 三、元亨

利貞（一） 四、元亨利貞（二） 五、元亨利貞（三） 六、熟

第三章 「與道爲體」——世界存立の形而上学的根拠——

第四章 「易」理解：一、朱熹「卜筮說」再考 二、卜筮說の

後先 三、易の心髄——数理 四、人の立つ所

第五章 「治」より「理」へ——陸贄・王安石・朱熹——

概説書などでは朱熹の思想に触れたことのない方には、何だか突拍子もない章立てに感じられるかも知れない。しかし、朱熹の思想資料を一度でも熟読したことのある方であれば、これらの章立てが、実に朱熹思想の根本問題を正面から突いた構成であることが理解できるはずである。例えば、「我々が「鏡」にものが入る」と表現している事柄を、朱熹はどのように理解していたのだろうか（「一九頁」という第一章冒頭の言句は、そこだけ見れば、いささか些末な問題提起に見えるだろう。しかし、すぐさま「鏡の示す、ものの姿をうつし出す」という事柄が、彼の思索の中心テーマである「明德」や「心」「易」といったものの靈妙なる働きを説明するための分かり易いモデルとして、共通して使用されている（「同上」という指摘を見るならば、そして何よりも、「鏡」についての朱熹の理解が「木や金属やという、我々が普通に「物質」と呼んでいるクラスの存在について、独自の内在的能力を張り互し張り詰めた「場」として考え、それによって人間を含む世界を理解しようとする存在理解の方式」（五九頁）につながっている、という結論を見るならば、木下氏の議論がいかに卓越したものであるかを察知することができる。このような例は該書の至るところに見出すことが出来る。もう一例だけ挙げておこう。「朱熹の思索の中心に触れている

という手ごたえの感じられるテキストの多くが、その内容を我々の言葉で追跡し、解説しようとするとき、極く自然に「時間」という言葉を我々に使用させる」（六七頁）という、従来の研究史から言えばどこにどう位置づけたらよいのか途方に暮れてしまうような書き起こしが、詳細を極めた検討ののち、朱熹は（論語）「川上の嘆」章の注解において「我々の生きる世界が本源的に「時間的」であるという解き難い問題に思念し至り、まさにその果てに「世界」変易の場」の存立をその芯において可能ならしめている「純粹持續意志」という形而上学的最高實在を推定したのだ」（二〇二頁）という結論へと至るのを確認したとき、多くの読者は哲学的議論のめたらず愉悅を満喫することになるであろう。

今、「問いの立て方」と「結論」だけを抜き出して該書の魅力を紹介したのであるが、実はこういう紹介の仕方こそ、該書の魅力から遠いものもないであろう。該書の最大の魅力は、その細部にある。例えば、以下の通り。「先ず、「所以」者」という言い方について。これは、それ有るが故に「……」という事態が成立するそれを提示するものである。「者」はそれが置かれたところまでの言句の示すものを話者が強く主題的に問題化して聴者に提示し、以下にその問題に對する自らの説明の言句が来るぞということを示して聴者に準備させる機能を果たす語である。（中略）「所以」者」とは、「所以」者」という係り結びの形で、或る事態成立のために不可欠な要件を主題的に問題化し、以下にその問題化されたものを具体的に指摘し解決する句法である（四〇頁）といった解説や、「ある意味では當時に常識であつたであろう「易」理解からはクレームのつききそうなことまでを勢いに乗って語っている。他人の記録ではあるが、その

自由で鋭く、ある皮肉な気分がチラチラするあたりは、やはり朱熹ならではの調子であろう。彼の「易」理解の率直な表明という点では一つの極点にあるテキストであると捉えたい（「三九頁」といったく（10）など。このように徹底的に細部にこだわりの、その細部に込められた思遣いまでも大胆かつ的確に汲み上げようとする姿勢は、まさに木下氏「ならではの調子」なのである。

ところで、木下氏は、なぜ細部にこだわるのであろうか。それは、従来なされた朱熹に関する「多くの論述は私が投げ込まれている細部における「読み」の覚束無きなど最初から存在しないかの如く考察を進めていた」（七頁）からであり、氏が「そもそも朱熹の「思想」ではなく、その「思索の生態」をここで捉えようとしている」（九頁）からである。

「思索の生態」とは何か。「テキストに現れる「言葉」はその時々動き輪転していた思索の現場の既にその瞬間において重層的であり複数的であり偶然的でもある「生ける思考」の「記録＝痕跡」である。（中略）すべての「言葉」はそれが現れる個々のテキストの「読み」という現場において質され寄与する限りに於いて意味を持つ（「記録＝生ける思考活動・言語活動の痕跡」なのである）。木下氏は、「微かな「痕跡」を追跡する「追跡者」「生きて姿を隠しつつあるその後ろ姿を捉えようとする「魅せられた者」（一〇頁）として、朱熹を「再読」しているのである。

このような視点が、他の四氏に顕著なコンテクスト主義的・思想的な問題関心と、その肌合いを大きく異にするのは確かである。「思想」の調査の場合には、「言葉」は「思想体」に恒存し変化しない「パーツ」として取り上げられる。したがって様々なテキスト

から、既に「一体を為す」と前提された「思想体」の同一なる「パーツ」として抽出され集められ、帰納的にその「思想体」の「パーツ」としての一義的な性格が確定されることがどうしても求められ、行なわれることになる。／「思想」を対象とする研究の裡には「発展史的」と称するものもある。しかしその研究も、その生涯を通じての「一つの思想体」を前提にはしないものの、如何に年月を細かく分けてそれからそれへの「思想」の変化を追跡しようとも、やはり、或る一瞬的にもせよそこにそれぞれに「一つである思想体」を想定し、その別のものへの変化を究明せんとする行き方であらう。したがって、テキストに現れる「言葉」はやはり「パーツ」として捉えられている（九頁）という言葉に、そのような相違は顕著である。にもかかわらず、「一つの思想体」への志向を拒絶する木下氏の態度のなかに、「宋明思想」的な問題構成への嫌悪を読み取ることは、それほど的外れであるようにも思えない。上述の潮流のなかで氏の研究を捉えることも可能なのである。

三 総括

以上、五冊の作品を紹介してきた。以下、これらをひと括りにした限りの総括と今後の課題について述べていきたい。

「宋明思想」という問題構成は、宋の朱熹と明の王守仁を中国近世思想史の二つの頂点／中心として捉える認識を下地にしている。彼らを人生の師と仰ぎ、彼らの導きに從つて自ら聖人為らんとする構えで研究を行なう学者はほとんど見られなくなったが（それが善いことなのか否かは私には分からない）、いわゆる學術研究として近世思想史に向き合うときにも、そういう認識は、様々な偏見や先

入見を研究者に与えがちである。例えば、北宋思想史は必然的に朱熹の思想へと、それも朱熹の自意識にかなった限りでの朱熹思想へと流れこんでいくという、あるいは、ポスト朱・ブレ王の時代である元代は当然のこととして思想の低迷期であるという、自ずからなるイメージの支配。哲学思想の真髄は儒学であり、その精粹は朱熹の（あるいは王守仁の）それであるという、もしくは、アンチ朱（あるいはアンチ王）は事の自然として「周辺」的な存在であるという、検証の前の選択。——もちろんこれらは、多分に戯画化した表現ではある。また、世界に冠たる成果を挙げてきた日本の「宋明思想」研究への敬意も、決して忘れるべきではない。しかしやはり、特定の思想家の視点を暗黙のうちに特権化してそこから思想史を単線的に整理してしまったり、体認的理解と称して自己の思索の貧困さを露呈するだけに終わったり、といった道行きに陥りがちな「宋明思想」という問題構成が、今こそ冷静な検証を受けるべきであることは確かである。

私は、そういう冷静な検証の営みとして、上述の五冊の書物を読んだ。これらの書物にはつきり見て取れるのは、①「現場」重視主義、②脱「神話」主義、③脱「訓詁」主義である。これら三点は、密接な関連性を持つ。論者によって多少の相違はあるにせよ、これら五冊の書物は、思想が発生する現場を重視しそこに肉薄しようとしている。思想の発生地点に立とうとするから、どれもみな後世によつて作られた「神話」（あるいは「物語」）には批判的である。そして、資料の性質によっては訓詁で済まず場合もあるが、基本的に現代語訳で議論を進めている（11）のも、現場のリアリティを何とか再現せんとする試みである。これらの構えが、従来の研究史

（12）に対する批判から来ていることは、以下の表現からもうかがえるよう。「従来、程頤等道学諸儒の思想の研究が、文献に記載されている内容から離れて、内在的理解の名のもとに研究者各自の思い入れを伴う演繹が重ねられていたのも事実である」（土田書一九頁）、「朱子学の主観側からみた単なる教学学説史としてではなく、その思想、学説内容の理解水準を落とすことなくその学の形成の社会文化史上の意味に目を向けた研究を充実させることは、日本においてはなおこれからのことのように思われる」（市来書四頁）、「むろん多くの勝れた朱熹についての研究書が既に存在し、それらを繙くこともした。がしかし、それらの示す論述自体が時に朱熹のテキストそのものよりもむしろ輪をかけて覚束無い思いを私にいだかせるものであった。多くの論述は私が投げ込まれている細部における「読み」の覚束無さなど最初から存在しないかの如く考察を進めていた」（木下書七頁）。これらの批判意識に支えられた、現場へと細部へと向かおうとする意志は、今後、何にも増して継承されていくべき事柄であろう。

もちろん、「意志」だけ受け継いでも仕方ない。社会史的な領域への土田氏の視点、市来氏が示したような資料論的な問題意識、木下氏のテキスト読解の手法、三浦氏の儒道三教すべてに通暁する姿勢、制度化された「中国哲学」の解体をめざす小島氏の方法論の提示、等々は、今後、批判的に継承しより洗練させていかなければならない事項であろう。もちろんその際には、「現場」とは（テキストの、あるいはコンテクストの）どこにあるのか、そもそも我々は「現場」に至り得るのか、我々はいかなる権利のもとに「細部」を読むべきなのか、という点に関する原理的な問いかけも、同時に

なさねるべきである。今ここで述べてきたことと視点は異なるものの、そのような原理的な問いかけという点で、私は、山口久和氏の連作「シノロジーの解剖」(13)に注目している。この連作が一日も早く一書にまとめ上げられることを切望してやまない。

最後に課題をもう一点あげておきたい。最初に、知や教養の世界の壊滅状況について言及した。いまこそ新たな知のあり方が求められていく時代である。それが善いことか悪いことかは分からないが、その新たな知のあり方を社会に向けて、積極的かつ簡明な形で提示する役割が、今まで以上に研究者に要求されるようになってきている。少なくとも、異分野の研究者との知的交流は、自覚的本格的に進めていかなければならない。そういう意味合いにおいて言えば、現在の宋明思想分野の研究では、過去の流れに「否」を突きつけそれを解体していくことは、本格的に始まりつつあるものの、新しい何かを提示するところには到達していない。現場に即した問題意識を汲み取り、開かれた言葉でそれを表現していくという姿勢は前の世代に比べて強くなってきたし、それ自体はとても歓迎すべき事柄である。しかし、そこで汲み取ってきた問題意識はいかなる意味で「問題」なのか、という点については、現在の宋明思想研究はまだ極めて不十分な成果しかあげ得ていない(14)。

手垢にまみれた神話や威勢のよい大きな物語は拒否された。虚像も退けられつつある。しかし、我々はまだ実像を手にかけていない、というのが実情ではなからうか(もしかしたら、「実像」などはなから存在しないのかも知れないが、それならそれで、そのことを精確に論じていかなければなるまい)。これまた最初に述べたように、いわゆる宋明分野の研究者は決して少なくはなく、本稿で紹介した

ように注目すべき業績が多く提出されている。だからこそ、我々は着実な次の一歩を踏み出していかなければならないのである。

「宋明思想」研究と言えは、私には、例えば、島田慶次氏や荒木見悟氏の名前がすぐさま浮かんでくる。彼らが示した思索の跡(15)を、後代から「粗い」とか「偏つている」とかと批判することは容易である。だからといって彼らのきわめて良心的な(と私には思われる)知的姿勢まで捨て去るべきだとは思わない(16)。思想の論理と情念とを思想家の内面にまで入り込み抉り取るうとする情熱、その思想分析の精度の高さ、自己の思索を普遍の相において語ろうとする一種の潔さ、等々を継承、維持しつつ、思想研究の新状況をより確かなものにしていく作業が、今日の最大の課題である。

注

(1) 本稿では、便宜上、著書として刊行されたもののみを対象にした。他に注目すべき研究が見当たらないというわけではないことは強調しておきたい。例えば、吾妻重二、小路口聡、中絶夫、馬淵昌也各氏の諸論考は、本稿の視点から言っても特に注目に値する。

(2) 小島書に対しては金子修一氏(『創文』四一四号、一九九九年)・市来津由彦氏(『しにか』一一八号、一九九九年)・末木恭彦氏(駒澤大学『文化』二〇号、二〇〇一年)の、土田書に対しては小島毅氏(『創文』四五三号、二〇〇三年)・木下鉄矢氏(注6を参照)の、市来書に対しては土田健次郎氏(『創文』四四七号、二〇〇二年)・吾妻重二氏(『集刊東洋学』八九号、二〇〇三年)・寺地蓮氏(『史学研究』二四三

号、二〇〇四年)の、各書評がすでに発表されている。三浦署に対する書評も、間もなく発表されるとのことである。木下書に対する書評は、寡聞にして知らない。

(3) 言うまでもなく、この表現は溝口雄三『李卓吾 正道を歩む異端』(集英社、一九八五年)から拝借した。

(4) もっとも、啓蒙書・入門書としての役割を意識するならば、もっと別の体裁を採るべきだったかも知れない。該書は、様々な意味でかなりの労苦を読者に強いる書物ではある。

(5) ただし、それが作者の思想史観なのだから仕方がないとは言え、程頤にかけた比重が少し大きすぎた嫌いはある。

(6) この点に関する指摘は、私の独創でも何でも無い。すでに木下鉄矢氏が「土田健次郎氏『道学の形成』第四章「程頤の思想と道学の登場」を読む―「理」―理解をめぐって―」(『東洋古典学研究』第一六集、二〇〇三年)という書評論文を発表されているが、それも土田氏の思想史理解の要諦が「理」にあるからである。この論文の中で木下氏は、土田氏の「理」―理解に対して、詳細で痛烈な批判を展開している。併読をお勧めしたい。なおそれとは別に、ここで使用した「整然」という表現は、該書の美点であるとともに難点でもあると私は考える。印象批評になって申し訳ないが、該書の叙述(というか、土田氏の思想史理解)は少し整然とし過ぎていて、言い換えると幾何学的な精神が勝り過ぎているように私には感じられた。

(7) ここでも一点不満を述べておくならば、市来氏の手法や叙述が慎重過ぎはしないかということである。これは、氏の過

誤では決しないのだが、この慎重さは、初心者や門外漢に魅力を伝えるべく作用してしまうように感じられる。

(8) ここにもまた、「宋明思想的な理論枠組に対する異議申し立てを見出すことができるだろう。」

(9) ただし、朱熹や王守仁の思索とどういう点において遜色がないのか、遜色ないとする三浦氏の判断の根拠(この表現が強すぎるのであれば、思想史整理の視点と言つてもよい)はどこにあるのか、が重厚すぎる叙述もあつて分かりづらい点は、該書の難点であろう。少なくとも私には、三浦氏がつないだ「心学」という稜線が全体としてどのような相貌を呈しているのか、明確に掌握できた自信はない。

(10) この引用部分を含む第四章の一部は、三浦國雄「朱晦庵と『易』―そのトピ説をめぐって―」(『東方学報』京都五五、一九八三年)に対する批判論文を基にしている。それに対する三浦國雄氏の反論が、『東洋古典学研究』第七集に載っている(木下鉄矢氏「理・象・数そして数・象・理―朱熹の「易」理解―」に寄せて、一九九九年)ので、そちらも参看いただきたい。この中で三浦國雄氏は「抜群に鋭く闘争的な分析力に恵まれた知性」「徹底したロゴス主義、理知主義」と木下氏を評している。私も同感であり、ここに木下氏の魅力と難点とが存している。私は、「実証的客観性」を欠くことを恐れる余りに「生ける何事か」への「繊細さ」を我々が失ってしまうこと(「二頁」)を心配する氏の姿勢に共感するが、それと同時に、氏の「闘争的な分析力」が「繊細さ」を押しつぶしかねない点を危惧している。

(11) もう一点、些末に見えて実はきわめて象徴的な事柄として、誰もが「朱子」とは呼ばず「朱熹」と呼んでいる点も挙げられよう。

(12) ここでは、便宜的に「従来の研究史」をひとしなみに扱ってしまっているが、このような変化は、いきなり現れたわけでもない。溝口雄三、佐野公治、吉田公平、三浦國雄各氏らの研究が、そのような変化をもたらしたと言えるかも知れない。本来であれば、これら戦前に生まれた研究者と、本稿で取りあげた昭和二、三〇年代生まれの研究者との異同についても論ずるべきであろうが、省略せざるを得ない。

(13) 「(一)その批判と提言」〔人文研究 大阪市立大学文学部紀要〕四六、一九九四年、(二)「テキストと解釈」(同四七、一九九五年)、(三)「テキストと解釈(2)」(同四九、一九九七年)、(四)「テキストと言語」(同五二、二〇〇〇年)。

(14) それは一つには、「中国の思考のアクチュアリティ」に迫り、そこで用いられた諸概念や思考の枠組を、実践的な方法として、「わたしたち」の現実によつて使い尽くすことが、なおも意味を有しているのだろうか」という中島隆博氏の問いかけ(フランクソワ・ジュリアン『道徳を基礎づける 孟子vs. カント、ルソー、ニーチェ』〔講談社、二〇〇二年〕の「解題」(三〇三頁))が、我々の間であまりにも忘れられ過ぎている、ということにもよるだろう。

(15) 荒木氏については、幸いなことに「示し続けている」と言うべきである。本稿は「宋明」について扱うと称しながら、実は「宋元」までしか扱っていない。それは、明代思想史研

究において著書という形で新傾向を体現したものがなかったからである。そのような中、荒木氏は氣迫のこもった著作を世に問い続けている。氏から学ぶべきことは、実に大きいと言わざるを得ない。

(16) もつとも私は、彼らが、後の世代に比して本来に「粗」くて「偏」っていたとは思っていない。思想史研究に期するものが変わっただけ、というのが真相ではなからうか。

*本稿は、文部科学省科学研究補助金(基盤研究B1「宋代士大夫の相互性と日常空間に関する思想文化的研究」(代表・佐藤慎一)、および若手研究B「清代後期紹興地方の思想文化に関する研究」(代表・早坂俊廣))による成果の一部である。